

## 土耕でもらくらく作業!イチゴの1条疎植栽培

イチゴ促成栽培は、栽植本数が多いことや、人が判断しながら行う作業もあるため、軽労化・省力化が進まず、特に土耕栽培では有効な省力栽培法は少ない。1条疎植栽培を行うと、定植株数は減少するが、慣行法との収量の差は比較的小さく、育苗作業や株ごとに行われる管理作業など、労働時間の短縮が期待できる。

### 内容

当センターハウスにおいて、イチゴ品種「さちのか」を用いて試験を行った。試験時期は、2008年9月～2011年4月、疎植区がうね幅100cm、1条植え、株間は年度により10cm、15cm、23cm、28cm及び46cm、対照区は場内慣行法であるうね幅120cm、2条植え、株間23cmとした(表)。定植株数はそれぞれ20株、そのうち調査株数は各区中央部の10株とした。試験は加温栽培とし、施肥は液肥で行った。

1条植えでは、うね幅が慣行法に対して100cmと狭くてよく、栽植密度は、株間を同一とした場合慣行の60%となる(表、図1)。これに対し、収穫開始から調査期間終了までの株当たり収量は、栽植密度が低いほど増加傾向で、1条植え・株間23cmの場合慣行より40%以上多くなり(図2)、10a当たり収量は慣行の約85%となった(図3)。収穫始期、平均果重、可販果率には大差がなかった(データ略)。

表 イチゴ疎植栽培の栽植方法

調査期間	条数	株間 (cm)	うね幅 (cm)	栽植密度 (株/10a)
2008/9/18	1条	23	100	4348
	1条	15	100	6667
2009/4/13	1条	10	100	8696
	2条	23	120	7246
2009/9/18	1条	23	100	4348
	1条	28	100	3571
2010/4/14	2条	23	120	7246
2010/9/13	1条	23	100	4348
	1条	46	100	2174
2011/4/15	2条	23	120	7246

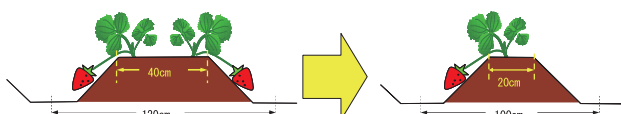


図1 うね形状の変更

以上より、イチゴ促成栽培において、株間23cmで1条植えとすると、大きくは減収しないまま面積当たり株数は60%へと大幅に低減できる。これにより育苗や管理作業などが軽減可能で、土耕における省力化の手段として有望と考えられる。

### 今後の方針

収量の増加を図るため、芽数管理や施肥管理の改良などを検討する。また、基肥一発施肥法や、定植・葉かき等の作業姿勢改善なども含めた総合的な労働軽減技術を開発していく計画である。

山本 晃一(農産園芸部)  
(問い合わせ先 電話: 0790-47-2423)

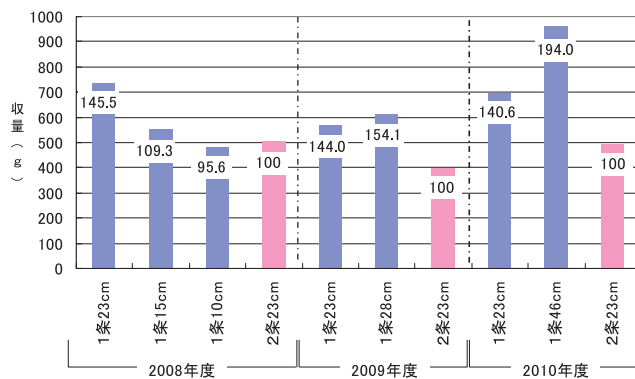


図2 株当たり収量  
各図共通: 収穫開始～調査期間終了までの収量  
棒グラフの数字は慣行を100としたときの相対値

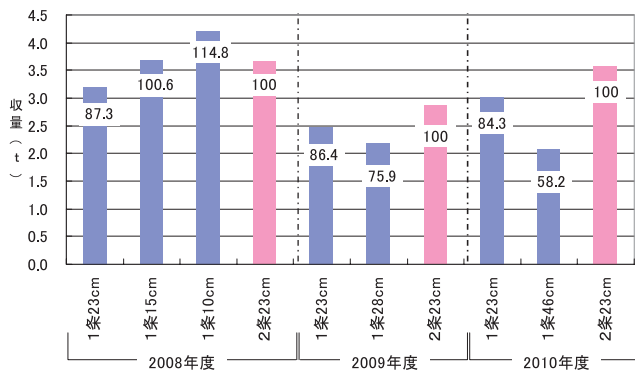


図3 10a当たりの収量